——内一枚は唇之二と唱へ、唇之二形に畫き、歌に成て申候と唱へ、青く彩色、歌五十に相成申候、此二枚は四枚の内、一札に御座候

參の四枚の内　青三と唱へ、青く彩色、歌五十に相成申候、四枚の内——内一枚赤三と唱へ、赤く畫き、歌十に相成申候——二御座候上の札に御座候

四の四枚の内　青四と唱へ、青く彩色、歌五十に相成申候、四枚の内——内一枚赤四と唱へ、赤く畫き、歌十に相成申候——二枚すべたの四と唱へ、歌に入不申候

五の四枚の内　青五と唱へ、青く畫き、歌五十に相成、四枚の内上の札に御座候——内一枚は赤五と唱へ、——内二枚はすべたの五と唱へ、歌に入不申候

六の四枚の内　青六と唱へ、金泥等にて彩色、歌六十に相成、四枚の内上の札に御座候——内一枚は赤六と唱へ、——内二枚は歌に入不申候

七の四枚の内　青七と唱へ、歌二十に相成申候——内一枚赤七と唱へ、歌十に相成申候

八の四枚の内　青八と唱へ、歌二十に相成申候——内一枚赤八と唱へ、歌十に相成申候

九の四枚の内　青九と唱へ、歌五十に相成申候、四枚之内上の札に御座候——内一枚は赤九と唱へ、歌十に相成申候——内二枚すべたと唱へ、歌に入不申候

十の四枚の内　釋迦十と唱へ、歌五十に相成申候、四枚の内上の札に御座候——内一枚はすだれ十と唱へ、歌十に相成申候——内二枚すべたと唱へ、歌に入不申候

十一の歌にて　青馬と唱へ、金泥等にて彩色、馬歌五十に相成申候、四の内上の札に御座候——内一枚は十の馬と唱へ、歌十に相成申候——内二枚すべたと唱へ、歌に入不申候

十二の歌にて　青きりと唱へ、金泥等にて彩色、歌五十に相成申候、四枚の内上の札に御座候——内一枚は十のきりと唱へ、歌十に相成申候——内二枚すべたと唱へ、歌に入不申候

うんたち　生れは長崎國訛、こりやうん達まだ市五郎三藏の船は見えいろ（博多）

「おぬしたち」（御主達）の訛略で、長崎地方の訛語。そなたら。

*__うんつく__　自身の押へ手ばまりの上戸なれば、本來無分別無常うんつくとも觀ずべし（屠八景）

人を罵っていふ語で、愚鈍、とんまの意。この語現今も信州北安曇郡小谷（佐野坂以北）地方で用ゐられてゐる。俚言集覽に「うんつく。運盡れば智惠の鏡もくもるといふ諺あり、因て智惠のなきを卑しめいふなるべし」。宍戸鐵舟撰・風流日本莊子・卷之一に「うかれ女に魂をとられ、辛き世に持ちにくい金銀を水のやうに遣ひ捨て、それを厭とも思はぬ、大どらともうんつくとも評に及ばぬ次第なり」。都の錦撰、風流源氏物語（元祿十六年刊）の序文に「運盡」に「うんつく」と傍訓してある。

え

えいえい　空に紫の雲氣たなびき、斗牛の間にえいえいたり（鰤山琵）

〔英英〕雲のたなびく貌。詩經に「英英白雲露彼菅茅」。

*__えいかん__　山彦征伐の勅宣を願ひ奉り候所に、叡感誠に淺からず（用明天皇）　かれて叡聞に達せし府内親王か忠節（百合若）　直ちに叡覽あるべしとて（鶯丸）　御退治の叡慮猶豫の由承り（用明天皇）

〔叡感〕叡は明また通の義、通明な智識と云ふことで、天子の御事について云ふ。叡感とは天子の御感じなされること。叡聞とは天子の聞召すこと。叡覽とは天子の御覽なされること。叡慮とは天子の思召。

*__えいきよく__　拙き藝の郢曲を御遊覽の爲ぞとて（源義經）

〔郢曲〕俗曲及び催馬樂・朗詠・今樣歌の類をいふ。文選に「蜀琴抽三白雪、郢曲發二陽春一」とありて、李善註に「客歌三郢中一、故曰三郢曲一也」。

えいじつ　隨分弓矢の稽古精出し申さうぞ、永日永日と暇乞して歸りけり（夕顏）　盃は永日永日、然らば春永末永月永日永、年の壽命も永々と（雪女）

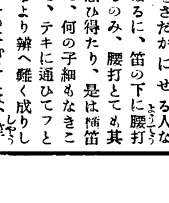
〔永日〕春永と同意語であつて、年の始に三四月頃の日の永き時分をさして云ひ、日永にゆつくりといふ意で、別れる時などの挨拶にいふ語。

*__えいめい__　小節を規る者は榮名をなすことなく（三國志）

〔榮名〕榮譽名聞。

〔小節を規る〕せつせつはかる者は云云」をも見よ。

えいらくせん　永樂錢の駕籠印（隨摩歌）



〔永樂錢〕萩城主、毛利大膳太夫吉廣の駕籠印。

えうええ　「いういう」（呦呦）を見よ。

えうええうじよ　「子の燕居せるえんきよし云云」を見よ。

*__えうがい__　金剛山を要害として住吉天王寺に打つて出で（女楠）　備嚴しき其景色鳥も通はぬ要害なり（凱陣八島）

〔要害〕類書纂要に「地形險固、我に在りては要となり敵に於ては害と爲る」。

えうたう　三十ばかりの亂れ髮、盛り過ぎたる夭桃の、春を傷める姿にて（女護島）

〔夭桃〕夭は若いこと。婦人の年若く盛んなのを桃花に喩へて夭桃と云ふ。太平記、立后事付三位殿御局の條に「夭桃の春を傷める粧云云」。

えうてう　花の地肌の窈窕と、目元に位備はりて（持統天皇）

〔窈窕〕女のたをやかな貌。詩經・周南關雎に「窈窕淑女、君子好逑」とありて、集傳に「窈窕、幽閒之意」。

*__えうでう__　寒竹のえうでうを梢の風に音添へり（十二段）

横笛を云ふ。伴蒿蹊撰・閑田耕筆・卷四に、笛をヨウデウと平家物語などに書きたり、笛の事とは知りても其由をさだかにせる人なし、體源抄は樂家の書なるに、笛の下に腰打といふ字を小書にしたるのみ、腰打とても其義辨ずまじきを、おのれ思ひ得たり、是は横笛の字を吳音によめるにて、何の子細もなきこと歟、笛は入聲の字にて、テキに通ひてフと書くべきなり、テウと誤るより辨へ難く成りしならん、又笛の字チヤクとよむことは、笛

笛琴笠碁と連續したる語にて知らる、同じ字も昔よりのならはしにて唱へ輙ずるなり」。

*えうやくじん　一度にぐわらりと投倒し、さあらぬ體にて立つたりしは妖厄神も斯くやらん（吉野忠信）

〔妖厄神〕惡魔。按ずるに、「やうらく」（瓔珞）を「えうらく」、「やうごふ」（永劫）を「えうごふ」など書いてあるので、「えうやくじん」も「やうやくじん」であらう。謠曲・熊坂に、「皆我先にと松明を、投込み投込み亂れ入る、勢はやうやく神も、面を向くべきやうぞなき」と見え、「やうやくじん」は陽厄神で、惡神のことであらう。されどなほ疑を存して、「えうやくじん」の假名に從つた。

えうらく

「やうらく」を見よ。

えかうろ　緋の袂に柄香爐を燻らせ（聖德太子）

〔柄香爐〕柄の附いた香爐であつて、金屬で作り、道師勤式の時に手に持つ具。

〔ろうかえ〕

*えぐちのきみ　江口の君が、假の宿に心留むなと申したは、それは色あるやさ法師（最明寺殿）　或人の申せしは、昔の西行法師こそ、誠の菩薩を見んと思ひはば江口の君を見よとある（賀古教信）

〔江口君〕攝津國西成郡江口の里の遊女。謠曲・江口に、西行法師と江口の君との幽靈物語を記して、西行法師が江口の君に宿を借らうとしたに貸せなかつたので、乃ち歌を詠じて、「世の中を厭ふまでこそかたからめ、假の宿りを惜む君かな」、遊女返歌して、「世を厭ふ人としし聞けば假の宿に、心留むなと思ふばかりぞ」といひ、これでお暇申すとて、忽ち江口の君の姿は普賢菩薩と現じ、船は白象となつて、光とともに白雲に打乘つて、西の空に行つたことが書いてある。　地名部「えぐち」をも見よ。

えぐちのしろめ　傾城とて落しめな、江口の白女・三國のまちといひし女郎は延喜の帝に請出され、歌は古今に入りしぞや（加增曾我）

〔江口白女〕江口は攝津國西成郡江口の里をいふ。白女は、大和物語に「津江口の遊女なる由見えてゐる。古今和歌集・離別部に、「いのちだに心にかなふものならば、何か別れの悲しからまし」の歌は卽ち白女の詠である。「延喜の帝に請出され」とあるは、この遊女の歌が延喜の帝の勅撰集（古今集）に入つてゐるからで、卽ち歌が請出されたわけである。

*えこ　例の梶原が依怙の沙汰、年月の悲しみ思ひやる（蛙合戰）　我が夫の國性爺殿たゞ一人助けては依怙となり（國性爺後日）

〔依怙〕かたびいき。法華經・譬喩品に、「無ン所二依怙一」。

えしやぢやうり

「ゑしやぢやうり」を見よ。

*えせ　辨慶といふえせ法師（吉野忠信）　素盞嗚尊といふえせ者の討手を蒙り、振袖姫）　傍若無人の繼父えせわらひ（女腹切）

〔似非〕似て非なること。「えせ」は古言・荒賊などの「えし」の轉といひ、或は辟（辟）の轉だともいふ。「えせ法師」とは佛道修業者に似ぬ惡僧。「えせ者」とは曲者。「えせわらひ」とは冷笑。

*えだ　無念なおのれ踏んだか、えだ骨もいでくれうと立上れば（丹波與作）　日本國中に八百萬の枝社（賀古教信）　太刀風松風吹き治りて、枝を鳴さぬ君子國（小栗判官）　色を見て枝を折り、脉を見て五臟を知る、歌人は居ながら名所を知る（天神記）

〔枝〕本よりわかれ出たもの。

〔枝骨〕とは肢骨卽ち手足の骨。

〔枝社〕とは支社のこと。

〔枝を鳴さぬ〕とは、靜穩なるをいひ、秦平の御代を云ふ。謠曲・高砂に、「四海波靜かに、國も治る時つ風、枝を鳴さぬ御代なれや」。王充論衡に、「太平之世、五日一風、十日一雨、風不ン鳴ン條」。

「枝を折る」とは、肢を折ること卽ち按摩するを云ふ。孟子・梁惠王上篇に、「爲二長者一折ン枝」とありて、四書辨疑に、「枝與ン肢通」と見え、趙注に、「折ン枝。案摩折二手節一解二體枝一也」。

えだうぐ　銀のつく打つたる鐵の棒提げ、これは源氏の大將鎭西八郎爲朝が得道具（孕常盤）

〔得道具〕得意の武器。俚言集覽に「得道具＝得物とも云」。

*えたりやおう　得たりやおうと綱・貞光、將軍太郎を組留むれば（閑八州）

〔得たりや應〕しめたといふ程の意であつて、勝誇つた時にいふ。謠曲・土蜘蛛に、「得たりやおうとの、しる聲」。

えづ

「ゑづ」を見よ。

*えつけのかがみ　柄附の鏡差出し、星影映してひらめかし（二枚繪）

〔柄附鏡〕昔の鏡は金屬製にて柄が附いてゐる。

えつさい　鷹はつみ・えつさい・さしば・せう・隼・このり（百日曾我）

〔鷂鮠〕つみ」を見よ。

えつらしよくきん

「ゑつらしよくきん」を見よ。

*えど　（淨瑠璃文中の註記）

〔江戸〕淨瑠璃節の一派なる江戸節をいひ、江戸半太夫の創作である。半太夫は元祖薩摩淨雲の末流で、聲曲類聚卷之三、江戸諸流淨瑠璃語の條に、「江戸半太夫＝幼名半之丞といふ、後江戸半太夫と改む、始は說經祭文の上手なりしを、肥前太夫がすゝむるにまかせ、淨瑠璃にかへて、則肥前太夫に學び、一家をなせり、甚左衛門町に住して境町に操芝居興行の後正徒薙髮して坂本梁雲といふ、貞享元祿の頃より世上にもてはやされ、今に江戸節又半太夫節とて騷る事なし、淨雲以後江戸にての名人なりしとかや」。

えどさくら　武藏に神田江戸櫻（賀古教信）

〔江戸櫻〕俳諧謠時記桜草（馬琴編・青藜補）に、「江戸櫻。遲櫻なり、葉少し赤し、花大輪にして莖長く下に垂る、この種關東に多き故に名とすとも云ふ」。

えどさんがい

「さんがい」を見よ。

えどばん　その折しも江戸番（女腹切）

〔江戸番〕諸侯の參勤交代によりて、諸侯及び家來が江戸詰の番にあたつて詰めること。

えどもとゆひ　江戸元結に繻子髮（女腹切）

〔江戸元結〕巖遊笑覽・一下に、「好色盛衰記に、烏丸に江戸もとゆひや有と云へり。國花萬葉記・七・武藏國名物類の內、髻結根本江戸に初

る、今世京都大阪にて專ら是を作る」。

＊えな　りんぼう變じてえなとなり（醒丸）

〔胞衣〕胎兒を包める膜、及びその胎盤。

＊えならず　奥にはえならぬ絲竹の調、謠にあらず歌にもあらず（源義經）

よう言はれぬ義、一通りならずおもしろい。徒然草・第四十四段に、「笛をえならず吹きすさびたる」。

＊えにし　三世の新造出世の本懷、衆生えにしのよすがなり（扇八景）

「えに」は「えぬ」（緣）の轉、「し」は助詞。緣。ゆかり。後撰集・戀歌五の部にも、「松山の末越す波のえにしあらば……」など見えてゐる。

えにしなきりりんな　往なうよ戻らうよと言うては妻戸に佇みし、えにしなきりりんな（女楠）

「暁の明星が西へちろり云々」を見よ。

＊えのころ　えのころえのころ抱寄せて、手飼に愛らしや（今宮）**むかひ殿えのころは未だ目か開かぬ**（兼好）

「いぬこ」（犬兒）が「えのこ」と轉訛して「ころ」の增加した語。いぬころ。犬兒。節用集（饅頭屋本）に、「狗」。

＊えびぢやう　貫木蝦錠しつとと下し（小栗判官）**蝦錠つかんでえいやつとこじ放し**（小栗判官）

〔蝦錠〕鐵樺の海老形に曲つた錠で、門の扉・貫木におろす。

＊えびでのにんじん　海老手の人參五箱で三十斤（博多）

〔海老手人參〕鞦韆國に產する人參で、飴色を帶び尾端曲つて海老の形に似たればいふ。人參とはこの草の根の形恰も人の參る形してゐるよりの名であつて、高貴の藥料である。和漢三才圖會・草類・人參の條に、「蝦手人參＝白頭山（朝鮮）之產出＝於鞦韆、蓋鞦韆土地水不清寒多、故其富蔡者常侵＝入參於＝井中＝用＝其水＝、更採＝出人參＝販之、故帶＝飴色＝而尾端曲似＝蝦形＝、所謂湯人參之類乎。」

えびらのうめ（最明寺殿）

〔箙の梅〕謠曲・箙に、「抑もこの生田の森は平家十萬騎の追手なりしに、源氏の方に梶原平三景時同じき源太景季、色ことなる梅花ありしを一枝折つて箙にさす、この花すなはち笠印となつて、氣色あらはに著く功名人に勝れしかば、景季かへつて此花を禮し、すなはち八幡の神木と敬せしより以來、名將の古跡の花なればとて、箙の梅とは申すなり」。

えぼしご

「えぼしご」を見よ。

＊えもん　そがの入鹿詮方盡き、冠も衣紋も打亂れ（大織冠）**人のしよていは衣紋が大事**（井筒）**衣紋繕ひ鬢かきなで**（女楠）**荒男俄にたしなむ衣紋つき、鬼が花見る風情なり**（博多）**衣紋引繕ふ**（雪女）

〔衣紋〕衣服の襟、著用の作法などをいひ、轉じて衣服のことにいふ。

「衣紋付」とは衣服の著ぶりの意。

「衣紋引繕ふ」とは衣服の著漾を正しうに直す意。雪女五枚羽子板のこゝの文に斯波左衞門が「衣紋引繕ひ御太刀持つて、靜々と廣間に立つて」と云ひ、簾內などの勇ある雜色を引率したこと、及び斯波左衞門が赤沼を罵つて、「鯨波の聲矢叫びに怯れて馬より落ちて目をまはさんより」といへる、總て平治物語なる光顯卿參內及び待賢門軍の信頼の記事から得たものである。

えもんながし　衣紋ながしの鞠の暮、花の木の間に頻りに上下し（持統天皇）**駒の蹴上げの鞠子川、衣紋流のああ曲もなや**（會稽山）**御簾に唐猫・烏帽子に鞠、衣紋流の柏木や**（吉岡染）

〔衣紋流〕蹴つた襟の衣紋を傳ひて落すを云ひ、蹴鞠の戲の曲名。

＊えら　やいやい勘十郎、廣い世界を己が口から世間手代のならひとは、えらが過ぎて聞きにくい（歌念佛）**ちよこさいなげさいろく、えら骨ひつかいでくれべい**（女殺）**いんげん吐かば草葉の蔭よりえら骨踏裂かん**（虎が磨）

「あぎと」（顎）の「顎が過ぎる」とは、頤が過ぎるといふ意。「顎骨」とは頤骨、即ち顎骨。

えらつき　刀を拂ひ打落し急所急所をえらつき、手に立つ者もなかりしが（蛙合戰）

〔鰓突〕魚の鰓を突刺すやうに突くこと。

えりおとし　五尺に足らぬ襟落し、狹き浮世は何かせん（薩摩歌）

〔襟落〕落しは裁ち落し、即ち仕立の意。襟は普通四尺八寸前後に仕立てるのであるから、「五尺に足らぬ襟落し」というたのである。

えりくりえんじよ　手綱搔繰りくろくろくろ、えりくりえんじよの馬場の土手、乘上げ乘下げ（小栗判官）

「いりくれえんだう」（入回縫道）が訛つて、「えりくりえん所」に變つたのであらう。入くれてだくぼくした所。徒然草・第百三十五段に、「いりくれんだう」とあるもこのことであらう。靜岡地方にて、子供等が打綱る遊戲に、「いにくりえんじよう」と云ふ名あるも、この語の轉訛である。（紫大門屋舗・寶永二年刊）三之卷に、「かゝは與茂三郎一人を連れ、耶繰えん所の松の一村を過ぎて」と見え、和訓栞に、「ゑぐる。鐫轉の義也刳をえぐむべし、俗語にゑりくり遠所などいふは、ゑりくるが如く九折の盤廻したるをいふ也」と見えてゐる。或は「えりくり」は「ゑりくり」の假名で鐫刳の義か）。

＊える　芋繩七筋えり合せ（吉野忠信）

「よる」（縒）の訛であつて、「えのき」（榎）を「よのぎ」「えな」（胞衣）を「よな」といふ類である。

＊えんいん　三因佛性の中には緣因殊に量りなき、佛の緣やいつとなく（用明天皇）

〔緣因〕「三因佛性」を見よ。

＊えんぎ　長者經とて寺に傳はる緣起の目錄聞かせたい（博多）

〔緣起〕因緣起生の義、轉じて神社佛寺の由來を記してある文書。また兆の意にいふ。

えんきよ

〔燕居〕「子の燕居せるとき云々」を見よ。

えんげつ　偃月の鐺鞘外し（大織冠）**偃月の戟會釋もなく振廻し**（國性爺）

〔偃月〕偃した月の意で、即ち半月にならぬ細い月をいひ、その形した身の鐺を偃月の鐺といふ。偃月の戟・偃月の刀など推して知れる。

えんす　ああ慮外ながら太夫でえんすと申しける（加增實我）

「あります」が「ありんす」「あんす」「えんす」などに訛略された語。また「ありやんす」「やんす」ともいふ。

えんせき 山鷄を鳳凰とし燕石を珠と見て(雪女)

〔燕石〕玉に似て非なる石。韓非子に「宋之愚人、得燕石于梧臺之側、藏之以爲大寶、周客聞而觀焉、笑曰此燕石也、與瓦甓同」。

えんでう 〔風綠野〕に收まつて煙條直し云々」を見よ。

***えんにち** 今日は祝ひ月二十八日御緣日、不動の双に喉笛を突き通され(氷朔日) 大聖不動の尊像、五月なり緣日なりと(會稽山)

〔緣日〕有緣日の略で、或佛菩薩が娑婆に緣ある日をいひ、又衆生がその佛菩薩に緣を結ぶ日をいふ。不動尊の緣日は毎月三日、八日、十六日、二十八日、及び酉の日であつて、巢林子のこゝの文は二十八日をいうたのである

***えんのぎやうじや** 役の行者ともいはるる佛が、若輩らしう何のわきがかりなされう(女殺)

〔役行者〕役小角をいひ、行者は修行者のこと、大和國葛城上郡茅原村の人である、佛法に歸依し咒術を善くす、年三十二で家を捨てて葛城山に入籠し、松果を食ひ藤葛を著、鬼神を驅使し、命を用ひぬ者をば咒して之を縛した、文武天皇之を聞かれて、妖術をもつて衆を惑はすものとされ、詔して小角を捕へしめられた、小角空を騰つて亡げ去る、吏捕へることできずしてその母を捕ふ、小角乃ち出でて縛に就く、よつて伊豆に流されたが赦に遇うて還り、後唐に行つたといふ。

えんばい 菅丞相は古今の學者、朝廷鹽梅の臣下なり(天神記)

〔鹽梅〕政事を料り理めること。尚書・說命に、「若作和羹爾惟鹽梅」とありて、藝傳に、「羹非鹽梅不和、人君雖有美質、必得賢人輔導、乃能成德、作羹者、鹽過則鹹、梅過則酸、鹽梅得中、然後成羹、臣之於君、當以柔濟剛、可濟否、左右規正、以成其德」。

***えんぶ** 思ひぞ出づる檀の浦のその船戰、今も亦閻浮にかへる生死の、海山一同に震動し(津戸三郎)

〔閻浮〕梵語・閻浮提(Jambudvipa)の略、須彌山中の娑婆世界に劇する所の稱、以て娑婆即ち現世の意にいふ。「けふの修羅の云々」をも見よ。

***えんぶだごん** 閻浮檀金の御佛(賀古教信)

〔閻浮檀金〕「えんぶだんごん」とも云ふ。閻浮は梵語・閻浮樹(Jambu drumu)を云ひ、檀は江の義。閻浮樹下を流れる江にある砂金をいふ。節用集(慶長二年刊)に「閻浮檀金。須彌之頂有閻浮樹、露落成此金、故云尒」。

えんりゑど 偏に厭離穢土の安心を勸め(大原問答)

〔厭離穢土〕穢土とは穢汚の世界即ち現世をいひ、極樂淨土に對する語。現世を厭うて離れろこと。

お

***おあし** おあしはあるかと問ひければ、金銀ばちと用意あり、おあしとては持たねども(松風)

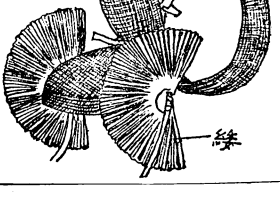
〔御脚〕俗に錢をいふ。「あし」を見よ。ここの文「おあしとては持たねども」といへる、いかにも上流の女としてふさはしい。

***おいいれ** 今の間に黑緣の乘物に乘せるぞ、老入の榮華まで此頃思案しめて置いた(地獄)

〔老入〕老後。

***おいかけ** おいかけしたる冠(松風)

〔緌〕冠の左右に附けてあるもので、剛い毛又は絲で製し、菊花を半切にしたやうな狀をなし、兩鬢の上に當てて恰も目隱しの如くなれるもの。緌はもと纓の結びの緒が派手に變化したものである。



おいがしらのかぶと 信玄床几を去つて老頭の兜かなぐれば(川中島)

〔老頭の兜〕兜の鉢の上に白毛を附けた兜。

***老の繰言** 老人はひつこく物を繰返して言ふより云ふ。(浦島)

***老の寢覺** 老人は寢ても早く目の覺めるものなればいふ(百合若)

おいへりう 兄樣はお家流で柔かな手ぢや(壬生大念佛)

〔御家流〕伏見天皇の皇子青蓮院尊圓法親王の書體の一流をいふ。文藝類聚に、「伏見天皇第六皇子青蓮院尊圓法親王上代の瘦癖を改めて、新に豐肌流麗の風を創す、然れども筆力柔脆に流れず上代の風あり、俗に御家流と稱し、古筆家・尊圓流と稱す」。

***おいまつ** 今に傳へて老松の、變らぬ色を賴まん(生玉)

〔老松〕筑前の安樂寺(今の太宰府天神宮の地)にある名木老松(謠曲・老松を見よ)に、大阪西天滿老松町をきかせたのである。老松は追松ともいひ、天神本地(慶安元年刊)に、梅は飛び櫻は枯るる世の中に何とて松のつれなかるらんの歌を菅公が詠まれたので、松も公の跡を追ひ來つたによつて、おひ松の神と申すと見えてゐる(天神本地は北野緣起に據つた作り物語である)。椙鳴曉筆卷十九に、菅丞相が愛された梅櫻松があつて、配流の後梅は飛んで配所の庭に生え、櫻は枯れければ、菅公乃ち梅は飛び櫻は枯るる世の中に松ばかりこそつれなかりけれと詠じ給はれたので、「さてこそ都の松は御跡を追うて西府には生えたりけれ、追松と申し侍るこれなり」と見えてゐる。巢林子作・心中天網島に「君を慕ひて太宰府へたつた一飛び梅田橋、跡おひ松の緣橋、別れを歎き悲しみて跡にこがるる櫻橋」とあるも、梅は飛びの歌に據つたのである。「あとおいまつ」をも見よ。生玉心中のここの文は天滿天神宮の場をうつすのであるから、謠がかりて莊重に幕を開くのであらう。

***おうげ** 日像上人と申せしは元より佛の應化故、衆生濟度のその爲に(大覺)

〔應化〕應現變化の義。佛菩薩が衆生濟度の爲に其身を變現すること。

おうこ 「あふこ」を見よ。

***おうご** あとにおうごの神風や、千波萬波を押切つて(國性爺)

〔擁護〕扶けまもる義、神佛の守護。金光明經・一に、「常親擁護此閻浮提」。謠曲・熊野に、「南を遙にながむれば、大悲擁護の薄霧、熊野權現のうつります」。この文は、あとに逢ふを擁護にいひかけ、神佛の守護によつて再會を得るを頼みとし、已等を守護されて神の吹かせ給ふ順風に乘じての意。(序に云、「おうご」を應護とし、感應加護の義としても意通じる)。

おうすながし おうすながしは保田の三郎(五人兄弟)

〔追洲流〕大洲流と書くは誤であらう。保田氏